

はじめに一鈴木報告の2つの論点から

- ①中国禅林の仙境を模したと考えられている庭園の構成要素に月が含まれる
  - ②庭園の鑑賞施設でもあった会所は、庭園それ自体ではなく八月十五夜・九月十三夜の名月を鑑賞する意図で造築  
⇒中世史料だけでなく、古代の『万葉集』『懐風藻』、『中右記』など古記録にみえる「観月」と歌宴にも注目
- ☞日本古代庭園と観月の関係について古代庭園史研究の成果と史料を踏まえコメント

#### 一 室町期の会所の成立

- ◎1990年代までの通説：寝殿造が変化した結果として会所をひとつの起源とする書院造が成立 ⇒2000年代以後、批判 ※寝殿造が書院造にとって替わったわけではない
  - ◎足利將軍御所において、新たな施設である会所の建築は、寝殿一郭とは異なる領域から発生(川上貢 2002)
  - ◎会所内部：主室ではなく周囲の諸室に飾り付けのための装置が整備され、時代を経てそれらが主室に揃うことで書院造の座敷飾りが成立(伊藤毅 2003)
- A 会所は室町期に成立した「新たな機能」をもつ建物施設  
B 庭園は寝殿造とそれ以前の源流をもつと考えられる  
⇒鈴木氏による観月と庭園の関係の指摘は示唆に富む指摘  
⇒しかし A 会所の成立と B 庭園史の流れは、一度、分けて考えてみる必要がある
- ☞古代庭園と観月の関係について確認

#### 二 古代の山齋(シマ)と観月

- ◎鈴木氏レジュメより：「仙境風景を模す縮景を行うことが中世日本における庭園の造成規範」⇒中世禅林の思想として日本に伝来(下線は評者による)
  - ◎同上：「池泉式庭園の水面や、枯山水に見られる水面を模した銀沙灘を海面や湖面に見立て、そこに反射した月光を嗜むのも会所における観月方法として重視」
- ☞仙境の縮景と観月の関係：八世紀の「山齋」における詩宴に多く見られる
- ◎山齋とは？
    - ・「シマ」と訓む。本来は園内での書見用の亭を指すが(金子裕之 2000)、『懐風藻』にみえる山齋は嶋に見立てて池の中に設置される築山や石の構築物を指すとともに、その様式の庭園を意味(大谷歩 2017)

## ◎山齋と神仙世界の関係とその受容・機能

### A 辰巳正明説（辰巳 1997・2004）

- ・『懐風藻』山齋詩に見える庭園：老荘的には神仙世界のミニチュアであり、仏教的には極楽浄土のミニチュアである
- ・その山岳風景は崑崙山や三神山（方丈・蓬萊・瀛洲）を基本とする。そのような山岳の造形は吉野山であったり、宮中の庭園であったりもする  
⇒「天皇の権威を示し永遠を願うもの」
- ・崑崙山世界と三神山世界は須弥山の世界を受け継ぐと思われるが、二つの山はともに世界山としてイメージが重ね合わさり、庭園＝山齋として受容された

### B 金子裕之説（金子 2000）

- ・七～九世紀の庭園遺構調査の成果と長屋王家木簡・文献史料等を照合し、「嶋と神仙思想」の視点から庭園の系譜を紐解いた基本文献
- ・古代の庭園を意味する「嶋」＝「山齋」は、神仙思想と関わりが深く、七世紀代に朝鮮半島経由で伝来した可能性が高い
- ・七世紀における半島型の「方形池」から、8世紀初頭の唐との交流を背景に「曲水型」の園池が展開
- ・九世紀以後、山岳と滝を構成要素に加えた類型が伝来し、平安前期の滝組みをもつ庭園が成立

### C 大谷歩説（大谷 2017）

- ・『懐風藻』の山齋詩を古典文学の立場から検討
- ・山齋は須弥山様式や三神山様式に基づく庭園であり、それらは池の中に小島や石を立てることで造形されるもの
- ・山齋は文人たちの憧れの空間であり、その庭園（シマ）を持つ別荘を山齋と呼んだ
- ・塵俗を離れた山水幽谷の地を「創造」し（したがって都城内部・近郊にも創出）、読書人たちが詩作と談論に耽る文芸と交友の場となった
- ・文人たちの交友は「松桂」や「風月」を楽しむ山水の地でなければならず、山齋の作り出す風景はそれを可能にした

☞ 山齋・山齋詩と月の関係は間接的に言及されるだけで、十分に解明されていない

## ◎古代の山齋詩と月 ☞ 「月」「風月」「松桂」に注目

### ①『懐風藻』河嶋皇子一首

五言。山齋。一絶。

塵外年光満ち、林間物候明らけし。風月遊席に澄み、松桂交情を期る。（世俗を離れた塵の外にはゆったりとした光が満ち、林の間には季節の風物が美しい。風や月は遊びの宴席に澄み渡り、松や桂のように香り高い交情（友情）を約束するのである）  
河嶋皇子は天智天皇の第二子。山齋は河嶋皇子の別荘

②『懷風藻』 治部卿境部王二首

五言。長王が宅にして宴す。一首。

新年寒氣盡き、上月濟光輕し。雪を送りて梅花笑み、霞を含みて竹葉清し。歌は是れ飛塵の曲、絃は即ち激流の聲。今日の賞を知らまく欲りせば、咸不歸の情あるといふことを（新年を迎え寒気が終わり、上月（新年最初の月）のふりそそぐ光は軽やかである。雪の季節を送った梅の花は微笑むように咲き、霞を含んだ竹の葉は清々しい。歌は飛塵の曲で箏の絃は激流の声のようだ。今日の楽しみを尽くそうと思い、参加者には家に帰らずここにしようという気持ちが現れている）

五言。秋夜山池に宴す。一首。

峰に對かひて菊酒を傾け、水に臨みて桐琴を拍つ。歸を忘れて明月を待つ、何ぞ憂へむ夜漏の深けむことを（山の峰に向かって菊酒を傾け、池の水に臨んでは桐琴を弾く。気持ちの良さに帰ることを忘れて明月の出るのを待つのであるが、どうして夜が更けたことなど気にすることがあろうか）

長王は長屋王。長屋王の山池＝山齋の宴時の境部王の詩。長屋王の山齋は佐保（平城京北郊。奈文研ではウワナベ古墳東南部に比定）の地にあり、作宝楼と呼ばれ、詩を詠むための施設が作られて、交友関係にある文人貴族や新羅使を招いて詩賦の宴が開かれる文化サロンとなっていた（辰巳正明 2021）。注目される点は「菊酒」（九月九日・重陽の節に飲む菊の花を浮かべた薬酒）を飲みながら「明月」を待っているので、八月十五夜ではなく九月十三夜の可能性がある。十三夜の月見は九世紀末～十世紀頃始まるというのが通説だが、すでに長屋王の山齋で行われていたのではないだろうか？

③『懷風藻』 山田史三方三首

五言。秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。一首。併せて序

君王敬愛の沖衿を以ちて、廣く琴樽の賞を闢く。使人敦厚の榮命を承けて、欣びて鳳鸞の儀を戴く。是に琳瑯目に満ち、蘿薜筵に充つ。玉俎華を雕り、星光煙幕に列る。珍羞味を錯へて、綺色霞帷に分かつ。羽爵騰飛し、賓主浮蟻に混じる。清談振發して、貴賤窓雞に忘る。歌台塵を落して、郢曲と巴音と雜はり響く。咲林罨を開き、珠輝霞影と共に相依る。時に露は旻序に凝り、風は商郊を転ず。寒蟬唱ひて柳葉飄り、霜鴈渡りて蘆花落つ。小山の丹桂、彩を別愁の篇に流す。長坂の紫蘭、馥を同心の翼に散らす。日は云（ここ）に暮れたり。月は將に繼がむとす。我を酔はすに五千の文を以てし、既に飽徳の地に舞踏す。我を博くするに三百の什を以てし、且つ敘志の場に狂簡す。清らかに西園の遊を写し、兼ねて南浦の送を陳ぶ。毫を含み藻を振ひ、式ちて高風を贊す。云々

白露珠を懸くる日、黄葉風に散らふ朝。三朝の使に對揖して、言に九秋の詔を盡くす。牙水は調を含みて激し、虞葵は扇に落ちて飄る。已に謝す靈台の下、徒らに瓊瑤に報いんと欲りす（白露が真珠となって草木にかかる秋の日、黄葉が風に散り落ちる秋の

朝。しばしば来朝する新羅の使人に向かい、ここに秋の九十日の音楽を尽くすことである。水は伯牙の流水のように激しく、虞葵は団扇に落ちて風に舞う。すでに、靈台の下を辞去するにあたり、粗末な詩を献呈して長屋王の宴に報いようと思う)

長屋王の山齋において、新羅使を招いて行われた「秋」の詩宴の場での山田史三方の詩。「九秋」は七・八・九月の計90日を指す。新羅使の帰国に当たり長屋王の山齋

(作宝楼と思われる)で送別の詩宴が開かれた時のものとされる(辰巳2021)。「白露」は二十四節気の八月節、「霜(雁)」は九月中、「黄葉」は『万葉集』では九月の歌に見えるので、新羅使の滞在は八月～九月にかけてであり、帰国・送別の詩宴は九月のことと思われる。注目すべき点は「日は云(ここ)に暮れたり。月は將に継がむとす」の詩句で、この詩宴は日没と月の出が交叉する瞬間を楽しむことを目的に開かれたのではないだろうか(十三夜?)。「星光煙幕に列る」の詩句も注目される。また

「靈台」は周の文王が建てた天文観測のための物見台を表し(『詩経』大雅・靈台)、漢代にも天文・雲気を観測する台(天文台)を表す「靈台」が見える(『後漢書』章帝紀)。ちなみに、「靈台」の語は『日本書紀』大化二年(646)二月戊辰詔(鐘櫃の制を定めた詔)にも、『芸文類聚』(初唐の類書〔百科事典〕)からの引用で「武王(周文王)靈台の囿(垣をもつ苑〔『説文解字』])有りて、賢者進む」と記されている。

つまり本詩では長屋王の山齋を「靈台」(序では「歌台」)＝天文台に喩えていると考えられ、この詩宴が九月の月見の宴であったことを示唆していると考え

られる。この他、『懷風藻』には山齋詩および月を詠った詩が豊富に収載されており、庭園・詩宴・月の関係の源流を考える上で『懷風藻』欠かすことができない素材といえる

◎「月舟」と神仙と詩宴

・『懷風藻』文武天皇三首

五言。月を詠む。一首。)

月舟霧渚に移り、楓楫霞濱に泛かぶ。台上流耀澄み、酒中去輪沈む。水下斜陰碎け、樹除秋光新し。獨り星間の鏡を以て、還りて雲漢の津に浮かぶ(月の舟は霧の渚に移り行き、楓の楫は霞の浜辺に浮かんでいる。台の上には月光が流れ輝き澄み、酒の注がれた酒杯には移りゆく月が沈んでいる。水の流れに月影は碎け、樹の隙間からは秋の光が差し始めた。月は自ら星々の間に浮かぶ鏡のように照りつつ、一巡りした舟は雲の立ちこめた天漢(天の川)の岸边に浮かんだ)

文武天皇が月を詠んだ詩。「秋光新し」き時に「台」上に月光が光り、酒杯には月輪が浮かぶという宴の様子が描かれている。この「台」は宴会のテーブルと訳されるのが通例だが、長屋王山齋の「靈台」と同じ意味があるのではないか。また辰巳和明によれば、月を舟に、桂を舟の楫に喩えているという。すなわち、月に桂が生えているという中国の伝説(『西陽雜俎(ようゆうざっそ)』〔唐代の隨筆〕)から、月と桂は双関語と考えられ、ここでは「月舟」と「楓楫」は対となっている。『万葉集』柿本人麻呂歌集に七夕に関わる「月船」の語が見えるが、中国では「月舟(船)」の語はな

く、代わりに「桂船」となっているという重要な指摘が為されている（辰巳 2021）。七夕の場面を描写していると理解されているが、いずれにせよ文武天皇の山齋（吉野宮？）に設けられた「台」での月見の宴とも考えられる。なお、『懐風藻』冒頭の「序」にはこの文武の詩賦の故事が「鳳翥の天皇、月舟を霧渚に泛かばす」と記されているが、文武は月舟に乗る（羽根を広げた）鳳凰に喩えられている。

おわりに

- ・月見と関わる神仙思想を背景にした施設は、八世紀においては山齋（シマ）として存在
  - ・施設には「台」（「霊台」）と表現された楼閣があり、観月の機能を持っていたことは疑いない
- Cf.長屋王家と関わる二条大路木簡「楼閣山水図」も参照（金子 2000）
- ⇒八世紀の山齋が平安、鎌倉、そして室町の庭園にどう受け継がれ、継承されたのか？
- ・中世の観月施設が禅林によっても、それは古代の山齋以来の神仙思想を表した庭園施設の「変容」なのか、あるいは「断絶」を考えるのか？

〔参考文献〕

伊藤毅「会所と草庵」（『都市の空間史』吉川弘文館、2003年）

大谷歩「古代日本の庭園の思想と美学—『懐風藻』の山齋詩をめぐって—」（『万葉古代学研究年報』17、奈良県立万葉文化館、2017年）金子裕之「嶋と神仙思想—7～9世紀の庭園の系譜—」（『道教と東アジア文化』13、2000年）

川上貢『日本建築史論考』（中央公論美術出版、2002年）

辰巳正明「風景論—松風の音と重巖の花について」（『万葉集と比較詩学』おうふう、1997年）

辰巳正明『詩霊論 人はなぜ詩に感動するのか』（笠間書院、2004年）

辰巳正明『新訂増補版 懐風藻全注釈』（花鳥社、2021年）